

賀茂社法楽勸進歌

— 図書寮叢刊『後崇光院歌合詠草類』補遺 —

昭和五十二年度図書寮叢刊『後崇光院歌合詠草類』編集時に所収を予定して居たのであるが、後崇光院の詠草である確証が掴めぬ為に見送った歌集である。今回再調査の結果、一首、全くの同一歌と思われる歌を発見し、後崇光院の詠草である確証が得られた為、新たに翻刻する事にした。

書誌に（い）記すと、28.4cm×20.4cm。江戸初期写の無奥書本。一冊。当部函架番号（一五四―二）。窠文散し輪繋ぎ七宝文様白抜の刷表紙。袋綴で、左上に段模様のある題簽に「賀茂社法楽勸進」とあり、御所本である。用紙は楮紙。墨付24枚。各面十二行書き、即ち、一首を上句二行に書き、その上部に歌題を書く形式で、各面六首所収する。短冊の形式をそのまま写したものであろう。

本書は井上宗雄博士が『中世歌壇史の研究 室町前期』（154～155頁）で紹介したもので、ほど、その部分で本書の概要は尽されて居る。同部分の要旨を簡略に紹介すれば、「書陵部蔵『賀茂社法楽勸進』と題簽ある江戸写一冊本は、歌に作者名も、また奥書もない残欠本であるが、後崇光

院の詠ではなからうか」と云う文章に始まり、「『看聞御記』によっては歌題その他の詳細は不明であるが、まず伏見殿の詠であろう。賀茂社法楽勸進という題は、巻頭分のみについているのであって、それが題となつたのではなからうか」と云う文章で終って居る。

以上のように本書内に関する限り作者に関する明徴はないが、所収年次は嘉吉二・三年内である。嘉吉二年の「看聞日記」本文はないが、嘉吉三年度はあり、本書の詠作年時と照合し得る記事を拾うと次の如くである。

①嘉吉三・二・廿四

統哥廿首当座詠、予、宮、宰相入道、源三位、隆富朝臣、有俊朝臣、重賢朝臣、経秀、即成院等候。

②嘉吉三・五・八

竹園当座哥詠、持経朝臣、有俊朝臣、経秀候。予合点、十首之内三首也。

③嘉吉三・七・一

月次和歌卅首、当座各詠、不及披講。

①は本書の一一に、②は一四に、③は一六にそれぞれ照合し、①の場合記録の方は、「続歌廿首当座詠」とあり、詠者は九名掲げてある。一の歌の方は三首であるが、これは、記録にある「予」の分、即ち、廿首中、後崇光院が詠んだ三首のみを抜き出したものと思われる。廿首を九人で詠み分ければ、一名二・三首と云う事になり、その上、詠草の末尾に「当座」とあるのも記録と合う。③と一六の関係も同様であり、この度は「月次和歌卅首」、詠草の方は三首で、記録に「当座各詠」とあるのも前者と同様の関係であろう。記録に「当座」「月次」とあり、詠草の末尾に「^{月次}当座」とあるのも照合し合う。猶、詠草の一五はその前月の朔日の月次和歌であるが、その末尾に、「^{当座}当座」とある。記録の方は、嘉吉三年はほぼ一年間の記事を有するので、各月の朔日を当って見ると、この七月朔日と、記事が半ばから失われてしまっている六月朔日（記録のある部分には月次和歌の記事はないが、七月朔日の行文と比較すると、欠文の部分にあったと推定される）以外には月次和歌の記事はなく、恐らく二度で終わってしまったものであろう。この事も又、この詠草と「看聞日記」との照合性を示して居よう。②の「竹園当座哥詠」とある箇所が最も照合性の強い部分で、「予合点、十首之内三首也」とあり、詠草は三首、第二首目にのみ合点が付されて居る。この書の中では、合点者の明記されて居る、雅世や堯孝以外で点があるのはこの部分のみである。こうした「看聞日記」本文との照合性によって、ほど後崇

光院の詠草である事が外形的に確認されるのであるが、今回の調査によって次の四首が類歌・同一歌である事が判明し、後崇光院の、過去の自詠を採用する性癖を鑑み、院の詠草と確認するに至ったものである。各①②③④の中、前に記した歌が本書所収の、後に記した歌が図書寮叢刊『後崇光院歌合詠草類』・「私家集大成 中世Ⅲ」（明治書院刊）所収の詠草である。

① 139 乞巧奠

七夕にたむくる琴のをのつから
雲井にひよく松かせの声

乞巧奠

「私家集大成」

後崇光院

III 162

七夕に手向る箏のをのつから
ひかぬしらめにかよふ松かせ

② 140 萩露

宮城野や分ゆく袖にみたれあひて
露も色そふ萩かはなすり

萩

図書寮叢刊

一一 18

宮城野やわけ入袖に露おちて
そめぬにそまる萩か花すり

「私家集大成」朱

後崇光院

I 232

ある人の重有朝臣によませし歌を、かの朝臣にかはりてよめる
萩露
宮城野やわけゆく袖に露落て そめぬにうつる萩か花すり
応永22年7月3日?9月13日の間の製作

③ 150 寄雨恋

さはるへき人の心のすゑなれや
はつおりしものゆふ暮の雨

寄雨恋

さはるへき人の心のすゑなれや

まつおりしものたくれの雨

④178薄
たちこむるきりのまかきのたえまより

ほのかになひく花すゝき哉

たちこむる峰のかすみのたへまより

ほのかにみゆる山さくらかな

図書寮叢刊
二五

〔菊葉和歌集〕巻第二 春下 実富朝臣母詠と同一歌

①②④は類歌に過ぎないものであるが、③は全くの同一歌であり、歌題も同一な上、前者の「はつおりしも」は、後者の「まつおりしも」の誤写と推測される。②と③は「禁裏御百首草永享六年 残欠」、即ち「後花園院御百首」の為の草案中のものであり、②の方は未だしも添削された方の歌を「後花園院百首」の方に採用して居るからよいものゝ、③に至ってはそのままの形で本書に採用して居る。「後花園院百首」は、「新統古今和歌集」撰進の為の公けの百首であり、その公表された詠草をそのまま、内々の千首の中に取り込むのであるから、驚くべき神経の持ち主と云えよう。或は、以上の類歌四首が総てこの千首中にある点、この種の千首が、かなりラフな精神で作られていた事を証するのかもしれない。

以上の考証で全体を後崇光院の詠草と考えてよからうと思うので、以下本書の概要を紹介する。賀茂社法楽勸進(哥)の題簽・内題を持つが、これは井上博士の発言にあるように最初の歌群(五首)にのみ冠したも

のと考えられ、以下は内々の当座歌会の書き留めと考えられる。それは、この巻頭の歌群と、五の千首、一〇の堯孝の点を持つ歌群以外は、総て詠作年月日の下に当座の注記を持つ上、歌数も端数であり、何人かで合して定数歌としたものと推定されるからである。詠作年月日は各歌群のほとんどもに記されて居るが、内容及び前記「看聞日記」本文との照合性から判断して前の歌群につくものとして翻刻した。最後の二首は詠作年月日がなく書写者の書きさしか、原本そのものに詠作年月日が無かったものか不明だが、恐らく前者であろう。即ち、前記図書寮叢刊(以下叢刊と略称)所収の「諸社法楽和歌」との類似から、筆まめな院故、自筆の書き留めがあつて、それを江戸初期に写したものであろう。本書の字體は大ぶりな、はっきりしたもので、幾分後崇光院の筆癖が漂う。その字配りから見て、間に何回かの書写を重ねたものではなく、直接宸筆から写されたものと考えられる。全十七ヶ度の詠草であり、年次は、十種が嘉吉二年度、七種が同三年度で、嘉吉二年四月十三日から翌年七月七日(最後の会は年次不明ながら七夕題である)迄の年次順の私家集とも云うべきものである。各回二首から一三首迄で、先に引用した記録②と、九や一〇の識語から、十首から百首に至る定数歌から自詠を抜き出したものと考えられる。五の「自三月三日百日詠歌各詠」とある詠草群は五ヶ度に涉つて催されており、これを細分すれば全二十一ヶ度と云う事になるが一ヶ度として扱った。この歌群は一九〇首に及ぶこの書の大半を占める歌群であるが、初度38首(春七・夏三・秋八・冬四・恋九・

雑七)、第二度39首(一〇・五・七・四・七・六)、第三度32首(四・四・八・三・六・七)、第四度36首(七・三・七・四・七・八)、第五度45首(七・五・五・五・恋なく雑二三)と、各回端数の歌を詠出しており、恐らくこれも他者の詠と合わせて200首ずつ詠出したものと推測される。この千首は纏まりもあり、後崇光院を知る上で参考になるが、他の詠草は当部にある「公宴統歌」(一五三―二〇八)中の後崇光院詠草と同程度の分量のもので、さして重要度の高いものではない。

後崇光院の合作千首の諸特徴については、「書陵部紀要第三一号」所載拙稿「後崇光院詠草を巡って」で触れたが、この書を翻刻する必要があるのも、この千首がある為である。叢刊では千首断簡二種(九2・一〇)を翻刻したが、九2の方は、同書の解題に記したように、凶書寮叢刊『看聞日記紙背文書』三二三と一致すると見られるが、文書の末尾には次のように記されて居る。

千首和歌、初心之輩、当座脂燭之風情、更不及沈吟、只拾瓦礫、投棄金玉、似忘後覽之嘲哂、須入火中者也

于時自永享元年三月三日至同参年六月下旬連々時々詠畢又、一〇の詠草の末にも次のような同様の文章が見られる。

正長二年自三月三日至六月十三日百日之間、千首詠早、初心之人々、当座指燭之風情、不及用捨、各不能沈吟、投瓦礫而已

後者の方が、三月三日に始まり、六月十三日に終る本書所収の詠出方法と一致する。この形式は別に重陽から始まるものもあり、その点日記本

文に詳しいが、作品と共に残るものとして「沙玉集」中巻のものがある。永享六年九月九日より百日のあひた、百首つゝ千首人々によませ侍る中に 貞成 (私家集大成中世Ⅲ 四九〇頁)

として、第一〇度迄、やはり端数の歌を載せ、最後に「千首の内百六十首詠早」と記して居る。以上三ヶ度の千首に於ける後崇光院の詠草数は、九2が203首、一〇が242首、「沙玉集」中のものが160首、そして、この詠草中のものが190首である。後崇光院の詠草のみを抜き出した形態から見れば、この「沙玉集」所収の永享六年の千首に最も形態的に近い。「沙玉集」中の千首は九月九日から百首ずつ十回に及ぶもので、この中の院の歌は第一回11首・二回15首・三回15首・四回20首・五回14首・六回16首・七回16首・八回16首・九回17首・一〇回19首で全159首、末尾に「千首の内百六十首詠早」とあるが、実質は一首少ない。今回のものは千首とは名打っては居ないが、全五回の各回の歌数は38・39・32・36・45首であって、各回ほど二倍である。出詠人数もそう変る事もなさそうであるし、各回二百首とすると歌題構成上少々疑義は残るが、全五百首と云うのも半端なので、全千首と推定してみた所以である。この千首は又、「百日詠歌」とはあるものゝ、百日百首として行われたのではなく、明らかに一日で二百首(乃至は百首)全五百首の場合)披講されたものである。全五度の催行日時は明記されて居り、冒頭に「自三月三日百日詠歌 各詠之」とあり、第一回の末尾に「嘉吉二年三月三日 初度」と記されて居る。一日の中に、最初の一纏りが行われたのであって、以下、四

月十一日、五月四日、五月廿八日、六月十三日に催され、その時期は必ずしも等間隔ではない。叢刊一〇の方は、一回百首、全五ヶ度しか残って居ないが、識語に「千首之内惣数」とあるので、十回に分けて行なわれた事は明瞭である。叢刊九二の方は、千首の中、雑の部の一部のみ詠草が伝わっており、残部のみで79首。他に歌題のみ恋の部から記された一紙があるので、両者を合わせて推定すると、これは千首を一単位として催行されたと考えられる。たゞ、前出の識語に「于時自永享式年三月三日至同参年六月下旬連々時々詠畢」とあって、この千首を、「連々時々」一年と百日程かかって詠んだ事が知られる。以上、四回の詠み方を整理すると、十ヶ度にして一日百首詠んだのが二回、五ヶ度にして一日二百首詠んだのが一回、この三回は共に、始行の日から詠み終る日迄百日かゝって行われて居る。残る一回は、時々集まって詠み一年と百ヶ日位延々として居るが、四回共、何人か集まって不定数の歌を詠んで居た事情は同一と考えられる。その具体的な有様は想像する以外に手だてはないが、恐らく探題で行なったものであろう。探題と云っても冒頭の歌を地下等が詠む筈がないので純粹に平等ではなく、何らかの慣例に従ったものと考えられる。このような詠歌形式を、何と云ったか不明だが、先に挙げた嘉吉三・二・廿四例に「統哥廿首」とある所から、「統歌」と称したと考えられる。前記当部蔵「公宴統哥」の外題を持つ、この時点の詠草を写した江戸初期の写本も、30首を中心に10首から100首迄の定数歌を何人かで不定数に詠んだものである。

残って居る詠草から推測される「統歌」の詠出方法は以上の如くであるが、記録から抽出される詠出方法はこれとは別で、百日稽古として、連歌一日「一両句ツ」、「和歌百首毎日一首」で、「毎日沙汰之」「百日之間一日も不闕」と、所謂着到形式である（前記「書陵部紀要第三一號」拙稿註七に、結論を得ないながら、詠草・記録両側面から詠歌形式について推測可能な資料を掲げておいた）。実際の千首詠草から導き出される詠法と、記録から導き出される詠法とは年次が異なるものゝ、この両者の間には何らかの接合点があると推定されるが、管見では、その關係を辿り得る資料は見当らない。以上の詠草資料からは、「短冊による定数歌の合作」と定義づけられるではあるが、「書陵部紀要三〇号」に小池一行氏資料紹介の、後崇光院自身のみの百首も又自身で「統歌百首」と命名されており、記録から抽出される詠出方法の具体例かと推測される。従って個人詠や着到の形式をも含み込む、短冊を綴ぐ（綴じ合わせる）形式で詠まれた歌（統哥五十首重之、看聞日記―嘉吉三・七・七一）を、統歌と称したとする伊地知鉄男氏の見解に従って置きたい（『探題と統歌と』小学館刊『日本国語大辞典』月報「ことばのまど」十一）。

九の13首の中の2首に合点を付した飛鳥井中納言入道は飛鳥井雅世、13首でありながら末尾に「当座百首の中」と記すのは、やはり、何人かて百首を詠じたものゝ中から後崇光院の詠草を抜き出した為と見られる。一〇の方の10首にして「百首内」と云う注記も同様の性格を示すものと見られる。この方は堯孝の点・批評があり、添削も同人かと見られ

る。「西行哥同類歎」と云った評を持つ歌や最後の述懐歌が示すような、口語的な発想による流暢な調べは院の晩年の傾向であるが、合点はこれとは別に、祝言風な、爽やかで難のない歌風の方について居る。飛鳥井雅世は院が晩年に特に師事した歌人で、永享六年の「後花園院御百首」や宝徳二年の「仙洞歌合」等、公けの会の為の詠作には必ず事前に雅世の添削を乞うており、叢刊所収の草稿によってその実体は辿り得る。常光院堯孝は、院と深い交際を持ち、又歌に判や合点を依頼した常光院堯尋の子であるが、世代の差の為か父程親しくはなかったと推察される。頼阿の曾孫に当り和歌所の開闢、雅世と共に当時の歌道の権威である。院の第二王子である貞常親王の代には、院の時代の雅世と堯尋のように、雅親と堯孝に師事して居る。本書所載歌は全体に素直な調べを持った二条風の題詠歌で、時として写実風（69等）、口語風（96等）、感覚風（235等）な面白味が交る。五の千首和歌の第五度目の歌題は、洒落た字を用いており、叢刊に翻刻した一〇の千首和歌の最初の百首の歌題と大変よく似て居る。猶、院の歌の纏ったものはこれで翻刻され尽したが、他に「公宴統歌」の類や、「看聞日記」所収の贈答歌類が残されて居る。

凡例

翻刻にあたって、異体・略体は正字に改めたが、常用漢字・通用漢字にあるものは、適宜使用した（嶋↓島・船↓船・早↓畢・季↓年）。しかし、通用漢字と字面の著しく異なるものは異体・旧字も用い（磯「鴈」「秋」「菴」「燈」等）、「哥」「歌」は使用されているまゝとした。又、解

題に触れたように、歌題の装飾風な表記は原本の短冊の性格を反映させて居るようなのでそのまま採用した（「遣」「鴨」「穉」「鶯」「鸞」等）。各歌頭には一連番号を付し、各和歌会を示す単位として和数字をその上に付した。各丁は「オ・ウ」の形で示した。歌題、和歌の書式は本文の形態通りとした。

（八寫正治）

賀茂社法楽勸進（題箋）

賀茂社法楽勸進哥

一 1 朝霞

春来もきえあへぬ雪の山はを
今朝は霞の又うつむなり

2 夜鹿

山さとはゆめこそなけれ夜もすから
鹿のなくねにおとろかされて

3 水鳥

あし鴨の浪の立ゐのひまやなき
こほりかねたる冬の池水

4 寄虫恋

かねてよりのみをかけてさゝかにの
いとゝまたるゝゆふ暮の空

5 祝言

神山の松のよはひにとりそへて
君を八千代と猶や祈らむ」一オ

嘉吉二年四月十三日

二 6 梅遠薫

はる風のさとをまかれすさそひきて
むめ(ハ)香ふかき遠の山本

7 依梅

いとゞ猶人そまたるゝ山さとの
軒はの梅にうくゑすの声

8 待客

あかすなをなかむる花の木本に
散待わふる春のゆふ暮

9 水浮

さくらちる花の木陰をゆく水の
なみにもつもる雪かとそみる

10 不知身

はかなくも人のつらさをうらむかな
かすならぬ身を思ひしらても」一ウ

11 契待恋

まちわふる心もいとゞつきはてぬ
たのめし暮の入あひのかね

12 会不

よしさらはありしちきりをうつゝにて
たえやはてなむ夢のうき橋

嘉吉二年二月八日 当座

16 寄月

頭恋

月見れはかゝる袂といひなして
もらしそめぬる我涙かな

嘉吉二年七月十日 当座

四 17 七夕

待わたるちきりそ遠き七夕の
あふ瀬にかくるかさゝきの橋

18 恋

あふと見てさめゆく夢のゆめならば
つらきや人のうつゝならまし

19 雑

うこきなきやまと島ねのおさまりて
風もみたれぬあし原の国

嘉吉二年七夕 当座「二ウ

五 20 早春霞

はれやらぬ雪けの雲はそれなから
かすみそふかき春の朝あけ

21 春曙

花の色はそれともみえすたちこめて
霞にあくる春の山のは

22 寄雲花

さかぬ間も花にまかへて山さくら
またき梢にかゝるしら雲

23 寄月花

わきてなを花のなかめはいろそひぬ
木のまの月の春の夜すから

三 13 寄月

待恋

なにゆへに月かど人のちきりけん
待夜深ぬる影もうらめし

14 寄月

めぐりあはむ行末までのかね事は
逢夜の月に契おくかな

15 寄月

いさゝらはたつねてもみんうき人も
今夜の月に我を待らむ」二オ

尋恋

24 春田

おのつからしつか心にまかせてや
水ゆたかなる春のなはしろ」三オ

25 河歎冬

口なしのいはぬ色にもやま吹の
をのかさかりに井手の玉河

26 暮春

したへともかひこそなけれ花とりの
色ねにくるゝ春を別を

27 夜亭橘

手枕に花たちはなのかほる夜は
見ぬむかしにもかへる夢哉

28 夏月

すみのほる影もすゝしき夏の夜の
ふけゆく月に秋かせやふく

29 螢

難波江のあしまにすたく螢火も
浪のよるゝ影はみえけり

30 初秋露

いとはやも軒はの萩におとつれて
露吹むすふあきのはつ風」三ツ

31 曉鷹

よこ雲はたちわかれゆくしのゝめに
おのか一つれわたるかりかね

32 深山鹿

やまふかく思ひ入ぬる身にたも
涙もよほすさを鹿の声

33 杜月

千枝をもる心つくしの月影に
いとゝしのたのもりの木からし

34 海邊
擣衣

これも又あまのすさみか夜もすから
波にたくへて衣うつこゑ

35 田家
秋空

守人もさそなさひしき小しかなく
山田のいほのゆふ暮の空

36 雨中
紅葉

露霜の八しほのなかの紅葉はも
雨にそふかき色まさりける」四オ

37 山家
暮秋

とはるへき人はあらしのやまさにと
暮行秋そいとゝかなしき

38 寝覚
時雨

たえて猶きくへきものかねさめして
まきの板やの夜半の時雨を

39 豊明
節会

おとめ子か豊のあかりのあけ方に
霜をかさぬる山あひの袖

40 冬月

木の葉をははらひつくせる山風の
跡よりはるゝ冬のよの月

41 雪朝

夜もすから静につもる庭の面に
明てそ雪のふかくなりぬる

42 忍恋

かひもなやしのふの山にとしへても
人のこゝろの奥をしらねは」四ウ

43 不逢恋

しらせはや身をし難波のかたゝかひ
あはても浪のしたのおもひを

44 後朝恋

わかれにし人の袖にややとりけむ
面影のこすあり明の月

45 久恋

いまさらにかけてかひなき契かな
うきとし月をふるの鳥橋

46 寄松
風恋

聞わひぬ我中のをは絶はてゝ
なをうきことにかよふ松風

47 寄関恋

いつかさて別にきかんおもひかね
こゆる関路の鳥の八声を

48 寄衣恋

さ夜ころもかへすならひのなかりせは
夢にも人にいかで逢見ん」五オ

49 寄鏡恋

おもかけをうつしもはてすます鏡
見るに涙のかきくらすかな

50 寄絶恋

おもひきや人のこゝろのつらさにも
我玉のをのたえんものとは

51 関鶏

とりの音もまたてやくゆる旅人の
せきの戸さゝぬ御代のしるしに

52 名所松

ふりにける梢もしるく神代より
いく世つもりのうらの松か枝

53 躡中雲

はる／＼と猶我方のへたゝりぬ
こへにし山の跡のしら雲

54 漁舟火

あま人のくるゝ浪路をこく船の
ほのかにみゆるいさり火のかけ」五ウ

55 眺望

日の影はしはし雲まにかけろひて
煙にくるゝ遠の里むら

56 田家水

あれはつる田の面の庵はおのつから
あさ行水そすみてみえける

57 秋述懐

いとゝなを露も涙もおきそひぬ
うき身を秋のゆふ暮の空

嘉吉二年三月三日 初度

58 湖上

志賀のうらや浪路はるかに見はたせは
霞そわたる天のはしたて

59 山居

山里のそともの野へのひめこ松
しつさへ千代のためしにや引」六オ

60 幽栖

たれすみて春をつくらむ山さとの
そともの竹の鶯のこゑ

61 野外

すみよしの松は霞になるまゝに
遠里をのは雪のむらきえ

62 柳無

うちなひく柳か枝にしられけり
ふくともみえぬ春のゆふかせ

63 野花

旅人のゆきゝの野へのさくらはな
あかて木陰に立とまるらん

64 遠望

とを山の花かあらぬかなかめやる
其方の空にかゝるしら雲

65 深夜

おのかとち声をしるへに鳥羽玉の
夜深空に帰かりかね」六ウ

66 橋辺

岩ねこす浪にちりしく山吹の
花をかけたる谷のうきはし

67 舟中

そことなく霞波路をこく船の
行末もしらす春そ暮ぬる

68 初聞

きゝ初てなをそ待るゝほとゝきす
たゝ一声のあかぬ名残に

69 池朝

池水のみきはのあやめけさは又
引手の袖にねをそかけぬる

70 簷橋

見る夢のさむる枕にかほりつゝ
むかしをのこす軒の橋

71 杜五

月雨

おのつからくつるにしろし五月雨の
日かすいく田の杜のしめなほ」七オ

72 行路

夕立

玉杵のみちゆき人の袖のはも
すゝしくなりぬ夕立の空

73 初秋

朝風

あさまたき柳の一葉ちり初て
目にみぬ風に秋そしらるゝ

74 野亭

夕萩

ゆふされは真萩の露やしけからし
花にかこへる野辺のかり庵

75 海上

待月

まつ程の心つくしかいせの海や
月のてしほにかゝるしら波

76 関路

惜月

あれわたる不破の関屋の板ひさし
もりくる月の影おしそ思

77 秋風

満野

あき風の野もせの草を吹からに
置そふ露そ猶みたれゆく」七ウ

78 露底

槿花

あさかほの花の籬にをく露の
きえあへぬ程やさかりなるらん

79 河辺

菊花

吹上のはまの真砂におく霜の
うつろふ色や白菊のはな

80 屋上

聞霰

きゝわひぬまきの板やのひまもなく
霰玉ちる冬の夜すから

81 庭雪

厭人

とはぬをやふかきなさけとおもはなん
跡つけかたき庭の白雪初敷

82 水江

寒芦

なにはかたあしのかれ葉に霜さえて
入江のかせのおとそさむけき

83 寒夜

水鳥

夜もすから氷やとつる鳩とりの
うき音も波の下の通路」八オ

84 初尋

縁恋

思ひそむるわかむらさきの色よりや
ゆかりの草をやかて尋ねん

85 旅宿

逢恋

わすれしな一夜伏見のくさまくら
むすふほとなき夢のちきりを

86 従門

帰恋

しるしありて尋門はいたつらに
さしてや人の杉の下いほ

87 増返

事恋

玉章の返しをみてもいとゝなを
まさるおもひをやる方もなき

88 疑真

偽恋

いかにせん我まことをも人はたゝ
なを偽とおもひはてなは

89 遇不

逢恋

いまま猶面影のこす月かけは
ありし其夜の形見なるらし」八ウ

90 互恨

絶恋

つゐにさて我中川のたえやせん
ふかきうらみの心くらへに

91 雨中

緑竹

ふる雨にさとの遠方暮はてゝ
みとりもふかくなひく呉竹

92 浪洗

石苔

山河のいはねをこゆるしら波は
こけのみとりを洗とそみる

93 春秋

野遊

子日せし野辺のこ松に引かへて
千草の花も心うつりぬ

94 海路

眺望

あはちかた絵しまか磯のほのくくと
浪ちはるかにあけのそほ舟

95 逐日 懐旧
いたつらにうつる月日はかさなれと
しのふむかしの帰世そなき」九オ

96 寄夢 無常
見る中の夢の憂世も夢なれや
さむるうつゝもうつゝならねは

嘉吉貳年四月十一日 第二度

97 立春氷
むすひるし氷も今朝はうちとけて
春たちかへる池のさゝなみ

98 簷梅
玉たれのひまをもかけて匂けり
軒はにあたる梅のした風

99 故郷 春月
ふるさとのあるゝ軒はをもる月は
むかしの春におもかはりして

100 春日遅
すかのねのなか／＼し日もおのつから
花見さりせはいかてくらさむ」九ウ

101 待郭公
木の下にやすらふ程そ待かねの
山ほとゝきすいまきなかなむ

102 夏草露
をく露もひまこそなけれ武蔵野ゝ
草はみながらしけりあひつゝ

103 夜川 篝火
かゝり火の影を波まにうつしつゝ
夜川の鵜舟数そそひぬる

104 樹陰 納涼
たちよりてけふもくらしつ吹風も
すゝしくかよふ杜の下かけ

105 秋夕
さひしさをなれもや思きり／＼す
いたくそわふる秋のゆふ暮

106 夕薄

夕かせは吹ともなしに糸すゝき
みたれて露そむすほゝれゆく」一〇オ

107 野亭 聞虫
露むすふ草の戸さしの明かたに
むしの音よはる野への秋かせ

108 関月
入月のなこりやおもふせきの戸の
あけかたちかきとりのそらねは

109 擣衣 響風
そことなく擣衣のおとやさそふらん
枕にひゝく夜半の秋かせ

110 紅葉 映月
てる月のひかりをそへてはゝそはら
うすきこすゑも紅葉してけり

111 菊久馥
秋ふかき露にかれゆくしら菊も
にほひはかりそなをのこりける

112 暮秋露
露をたに秋のかたみにをきてみん
さそひなはてそ野辺の夕風」一〇ウ

113 庭霜
置まよふしもは浅茅の庭の面に
かれ／＼のこるむしの声哉

114 古屋霰
夜もすから古やの軒の板ひさし
ひまもあらはにちる霰かな

115 池水
よをへつゝ凍ます田の池水に
うきねたえたるあし鴨の声

116 寄雲恋
つゐにさて身を憂富士の中空に
たゝよふ雲のおもひきえぬや

117 寄月恋
待人はとはても杉のいたひさし
たのめぬ月のかけそもりくる

118 寄山恋

いかにせん忍の山にしへても
人のこゝろのおくをしらすは」一二オ

119 寄杣

憂人に心ひきてもかひなしや
たゝかすならぬみよの杣木は

120 寄朽

としへても猶数ならぬ深山木は
しる人もなく朽やはてなむ

121 寄忘

しのふにはあらぬ軒はの草の名よ
わかうき中になをしけれどゝ

122 名所松

住吉の神にたむけのことのはも
いく代つものうらの松か枝

123 名所鶴

和哥のうらやあし間のたつも諸声に
雲井の友を猶さそふなり

124 旅行

やがてまつ宿をやからん旅ころも
日もゆふ暮のさとの一むら」一二ウ

125 田家煙

あはれなる山田の庵のゆふ暮に
心ほそくも立けふりかな

126 独述懐

石清水ふかきちかひをさりとともと
うき身ひとつに猶たのむかな

127 往事

まとろまで見る夢なれや思出の
すぎこしかたもうつゝならねは

128 积教

今もなを鷲の御山にかけすみぬ
雲かくれにし月のひかりは

129 山霞

久方の雲井をかけて出る日の
のとかにかすむあまのかく山」一二オ

130 梅薫風

おほつかなたつきもしらぬ春風の
匂山路のむめのこのもと

131 春雨

春雨のふるのはさはおのつから
まかせぬ水そ猶ゆたかなる

132 若草

もえいつるみとりの色もうす雪の
たえまににほふ野への若草

133 行路柳

旅人の袖もみとりになひきけり
みちのゆくての青柳の糸

134 初花

いまよりの心つくしとみえてけり
かつさく花の木ゝの下かせ

135 惜花

ちる花を惜習といかゝして
吹くる風におもひしらせん」一二ウ

136 首夏

見し花の面影しけるさくらあさの
おふのうらなし夏はきにけり

137 夏草

ふる郷に分こし路の跡もなく
しけりにけりな庭の夏くさ

138 六月秋

夏もはやけふ六月のみそきして
秋たち帰る賀茂の川波

139 乞巧奠

七夕にたむくる琴のをのつから
雲井にひゝく松かせの声

140 萩露

宮城野や分ゆく袖にみたれあひて
露も色そふ萩かはなすり

嘉吉二年五月四日 第三度

141 湖月

塩やかぬけふりをたてぬしかの浦は
にほてる月のかけそさやけき」一三〇

142 野月

風そよくいなの小篠の夜もすから
みたるゝ露にやとる月かけ

143 庭月

古郷のあさちか庭にすむ月を
誰かむかしの友と見るらん

144 聞搗衣

しつたにも心ありけるすさみかな
月に夜すから衣うつ声

145 河紅葉

かつらぎの山のもみちのちりうきて
くれなるふかき飛鳥川浪

146 初冬

時雨

いつしかも冬きにけりな時雨ゆく
雲にかけるふ日影さむしも

147 積雪

ふきはらふ嵐も今はうつもれて
つもるまゝなる松のしら雪」一三三

148 池氷

池水の鳩のかよひもたえはてぬ
こほりのせきのへたてはかりに

149 鴻千鳥

あかし鴻浪まの月の夜もすから
友をさそひてなく千とりかな

150 寄雨恋

さはるへき人の心のすゑなれや
はつおりしものゆふ暮の雨

151 寄山恋

逢とみてさむるうつゝの宇津の山
夢にやこえしつたのした道

152 寄原恋

一ふしのあはれをかけよをさゝ原
風まつ程の露のいのちに

153 寄関恋

こえやらてすゑ白川のせき路には
わか憂中の秋風そふく」一四〇

154 寄木恋

かしは木の煙となりし行多こそ
世にためしなき名をはたてぬれ

155 寄玉恋

つゝみかね涙の玉のかすゝに
おもひくたくる袖のうへかな

156 寄枕恋

やかてはやうちとけにけり新枕
かはし初ぬる中の下ひも

157 夜燈

とほし火はかゝけつくせるまとの内に
軒もる月のひかりをそみる

158 里竹

やまさとの竹一むらのしほりかき
これやとなりのへたてなるらん

159 磯巖

あらいそのいはほによするしら波は
くたけて玉のちるかとそみる」一四四

160 浦船

さゝ浪や志賀のうら船ほのゝくと
こきゆくあとにのこる月影

161 岸苔

神代よりかはらぬ色にむすこけの
おなしみとりの住吉のきし

162 山家水

山さとのかけひの水おとつれば
こゝろをすます友とこそきけ

163 旅行

入逢のおともかすかにくれはてゝ
里とひかぬる旅の一つれ

164 海眺望

暮わたるよさのうな原見わたせん
入日そかゝるあまのはしたて

嘉吉二年五月廿八日 第四度 一五〇

165 鷺 日影うつる軒はの竹のあさ霜も
ともにとけぬるうくゐすの声
あを柳のいとに玉ぬく白露の
みたれてよはき春のゆふ風
166 柳 さほひめの袖のみとりのうすかすみ
たつや衣の妻なしの花
167 梨 大空はかすみもともにたちこめて
あかるもみえぬゆふ雲雀哉
168 鶺鴒 なはしろの水を心にまかせてや
しめゆふ小田にかはつなくらん
169 蛙 おのつから一夜やねなんむらさきの
花をゆかりにすみれつむ野は 一五ウ
170 菫 てりそひてゆふ日もとにくれないの
一しほふかきいはつゝし哉
171 躑躅 待わひて思ひねさめの郭公
たゝ一こゑは夢かうつゝか
172 纏 天の戸のあくる程なき短夜を
またて水鶏のなをたゝく也
173 鴟 しはしまつ夏をわすれてねやの内に
ならすあふぎの風そすゝしき
174 扇 日のかけはもらぬしけみの梢より
せみなきいつるこゑそすゝしき
175 蟬

176 蓮 さなからに玉かとみえて池水の
はすのうき葉における露かな 一六〇
177 露 大方の秋のならひにをくつゆを
ものおもふ袖と人やとかめん
たちこむるきりのまかきのたえまより
ほのかになひく花すゝき哉
178 薄 そことなく声はかりして暮かゝる
雲のはたてをわたるかりかね
179 鴈 しけりあふよもきか門のさして猶
誰松むしのねをは鳴らむ
180 虫 たつ田川くれないふかくみえてけり
嶺のもみちの影をふかめて
181 蒙 しもむすふいな野小篠の夜もすから
やとれる月のかけそさひしき 一六ウ
182 霜 雪ならばともゝ待ましやまさとの
みそれふる日そことにさひしき
183 霰 風ませにみ山の小さゝさやくなり
さそなあられの玉とちるらむ
184 霰 ふる雪にしらふのたかはまかへとも
すゝのおとこそしるへなりけれ
185 鷹 夜もすからをきかふ霜をかさねつゝ
ねやのふすまそさえまさりける
186 衾 かねの音も月もかすかにのこりけり
よこ雲わたるあかつきの山
187 暁

188 夕 秋にしもあらぬ夕のさひしきは
うき身にかきりあはれ成けり」一七オ

189 星 あきらけき星のひかりの影のみそ
あけゆく空にしはしのこれる

190 風 吹かせに四方のくさきもおしなへて
君かめくみになひくとそみる
をのつから民のかまとのにきわいも
よそにしられてたつけふり哉

191 煙 をしなへてしるもしらぬも旅人の
行逢坂のせき路なるらん

192 関 草枕旅ねの夢もたえ／＼に
むすひそかぬる野へのかりいほ

193 庵 窓ちかくうへてはきかし夜もすから
竹の葉分の風そにしむ」一七ウ

195 塙 山里の軒端にかこふ松かきに
たえすあらしのおとそへたてぬ

196 竹 すなをなるきみか心のともなれや
さかきの竹のよろつ代までも

197 蓬 あれはつる蓬かやとをきてみれば
もと見し月のかけそすみける

198 薦 かりのこすよと野まこもそのまゝに
くちてやいとゝ波の下草

199 杉 三輪ならぬこれもしるしの杉の門
さして尋る人しなけれと

200 柏 むら雨のおとをのこしてならのはの
ひろはをわたる夜半の秋かせ」一八オ

201 鷺 白鷺のつはさしほれてわたるなり
むら雨すくるをちの山もと

202 鶏 おほつかなゆふ付とりのいかなれば
あけゆく空にねをはなく覽

203 猿 山さとの松のあらしもふくる夜に
さひしさいとゝましらなく声

204 牛 法の道思ひ入ぬるしるへには
たゝ小車の牛とこそみれ

205 菴 みるまゝに月に心をのへしきぬ
かたしく夜半のとこのさ菴

206 箏 引箏のをのかしらへにたくへつゝ
たえすもかよふみねの松風」一八ウ

207 燈 窓に入月のひかりを見るまゝに
かへにそむくるよるのともし火

208 舟 おいてにや比良の山風吹ぬらん
奥にそいつる志賀のうら船

209 弓 あつさ弓やまと島ねのほかまでも
おさまれる世のためしにそ引

嘉吉式年六月十三日 第五度
百日畢

六 210月前雲

名にしほふ月待ほとこの山のはに
心あるへき夜半のうき雲

211月前

擣衣

をく霜のあるちかやとに秋更て
月の夜寒に衣うつなり」一九オ

212寄月

旅

せきやには心もとめす夜もすから
月にそこゆる不破の中山

嘉吉二年八月十五夜 当座

七 213風告

秋

やかてはや萩のうは葉におとつれて
めに見ぬ秋そ風にしらるゝ

214不逢

恋

袖にをく涙の川を行水の
あはてやつゐに思ひきえなん

嘉吉二年八月廿日 当座

八 215寄月

恋

つゝむ中のうき名もよしやさりとては
こよひの月に人のとへかし」一九ウ

216

いさゝらはこよひの月をかことにて
我忍ねをもらしそめなん

217

面影をさそひもはてす袖の上に
なみたをやとす夜半の月哉

嘉吉二年八月十三夜 当座

九 218新種雨

秋きぬとゆふへの空のむら雨に
いつしか袖もしほれ初けり

219岡萩

こゝろなき袖にやうつる山かつの
行来の岡の萩か花すり

220浅茅露

ゆふされは小野ゝあさちをふく風に
あまりて露やみたれちるらん」二〇オ

221閑中

秋夕

たえてなをすむへきものか世をいとふ
み山のいほの秋のゆふくれ

222旅宿鹿

へたひころも妻とふ鹿もあはれなり
ふるさとおもふ秋のねさめに

223初鴈

連雲

なかむれは雲路につゝくはつ鴈の
つらもみたれて秋風そふく

224月契繩

契つゝ其行末もひさかたの
月は幾代の秋になれまし

225草庵月

月のみそすむとはみゆる露むすふ
草のいほりの秋のよすから

226泊月

よしさらは今夜は月にあかし方
浪の枕のうきねなりとも」二〇ウ

227擣衣稀

きぬたうつおとそまれなるたかさとも
秋の夜さむやいたりいたしぬ

228 菊久靄

花ははやうつろふ色もしらきくの
にほひや千代の秋をかさねん

229 霧隔帆

とをさかるほかけも浪もへたよりて
きりにきえゆく奥のつり船

230 雨後

時雨つる跡に入日のてりそひて
なを色ふかき山のもみちは

嘉吉二年九月十三夜 当座
百首の中飛鳥井「二一〇」
中納言入道点

238 寄忍

いまさらに色にないてそ忍草
葉すゑの露のかゝる思ひは

239 名所鶴

〱万代をつもりのうらにすむたつもの
よはひは君かたくひならまし

240 述懐

ひろふへき玉もなきさのも塩草
かくもかひなき和哥のうら浪

嘉吉式年十月廿五日 百首内
常光院堯孝法印点「二二〇」

一〇 231 初春霞

〱こゝのへの大内山のあさかすみ
たちこそそむれ千代の初春

232 尋花

西行哥回類歌
にほひくるあらしを花のしるへにて
またみぬ山にたつね入かな

233 夜川

篝火
鵜飼する川瀬の篝さすほとも
波まにしらむみしか夜のそら

234 夕薄

ほのかなる袖かとみえて夕霧の
たえまになひく野への小薄

235 野月

月かけの出も入もむさし野は
おはなの浪にかゝるとそみる

236 深雪

ふるさとのこすゑひとつにうつもれて
雪にはれたる三吉野〱奥「二一ウ」

237 寄山恋

〱もらさしと心のおくにせきわひぬ
人めしのふのやまの下水

一一 241 遠村梅

たちこむる霞のひまもおのつから
梅か香にほふをちの里むら

242 忍久恋

しられしなとしをふる木のそなれ松
待につれなき色にみえすは

243 返書恋

はかなしや人のつらさにやる文の
返すをたにもたのみける身は

嘉吉三年二月廿四日 当座

一二 244 夏風

花衣うつるならひとしらかさね
一えに今朝はかせそまたる〱

245 夏木

たまくらに花橘やにほふらん
むかしにかへるうたゝねの夢「二三ウ」

246 夏山

ちりのこる花かとみえて夏山の
しけるこすゑにかゝる白雲

247 夏鳥

ほととぎす枕をすくる一声は
たうたゝねの夢かうつゝか

248 夏恋

ふけなはとたのめし人のかね事を
待らんとすれはみしか夜の空

249 夏旅

かけて猶露こそむすへ葵草
かりねの野への袖のかたしき

嘉吉三年四月十六日 当座

254 時鳥

人しれす猶まつものを郭公
こぬ夜あまたと恨わひても

255 郭公

五月雨の雲まの月にほととぎす
こゝろつくしのねをやかたらふ」二三ッ

嘉吉三年五月八日 当座

一五 256 余花

あやなくもすきにし春は見すもあらず
みもせぬ花ののこる夏山

257 言出恋

けふそはや岩まの水のあさからぬ
心のうちをもらしそめぬる

258 躑中関

みる夢もむすひそあへぬ草まくら
とけてぬぬ夜の下紐のせき

嘉吉三年六月朔日 当座
月次初座

一三 250 漸待花

待程のこゝろつくしか山ざくら
またきこすゑにかゝる白雲」二三オ

251 社頭花

おとこ山たむくる花の八重かき
かけてけふとふ春のしらゆふ

252 寄花恋

花そめのそでの涙の色にいてよ
人の心のうつるはかりに

嘉吉三年三月尽 当座

一六 259 野亭萩

おのつから花にそかこふ秋萩を
しからむしつか野辺のいはりは」二四オ

260 水郷月

又よそにたくひもあらし難波かた
なみまの月のかゝるなかめは

261 逢恋

あひ見ても猶ほのかなるちぎり哉
のきはの萩の露の夜すから

一四 253 郭公

あし引の山ほととぎすきなくなり
待にかひあるねをもらしつゝ

嘉吉三年七月一日 当月座

一七 262 七夕

庚申

たなはたのねぬ夜にあへるうらみさへ
かさねてしほる天の羽衣

263 七夕

親

七夕の心なかくもひくいとの
むすぶちきりはたえしとおもふ

(二行空白)

「二四ウ

一三 264 七夕

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

